

栗山容子先生のご退職にあたって

On Professor Yoko Kuriyama's Retirement

立川 明 TACHIKAWA, Akira

● 国際基督教大学名誉教授
Emeritus Professor of International Christian University

栗山容子先生と私とは教員として同期生です。今を去るかなりの昔、1978年の9月初旬と記憶しますが、私は数年の留学を終えて合衆国大陸を車で横断し、ICUに着任しました。未だ方向感覚が正常化していなかったからか、それとも新築間もない教育研究棟の階段の向きが異例だったせいかわ、大きくもない建物に入ってから教育学科に中々たどり着けませんでした。懐かしい小泉ナヲ子さんの声のする方向へ手探りの如く歩み、ようやく三階の学科室を見つけると程なく、一緒に着任した方がいますから、と研究棟北側の一室へ案内されました。西側の壁に向かって座った栗山先生と、ドア越しに初めて対面したのです。お話しした内容は失念しましたが、椅子から立ち上がり、緊張気味な笑顔でお迎えくださった姿を、はっきりと記憶しています。

それからの何年かはお互い、新任教員に相応しく、講義の準備その他に追われていたのでしょう、ゆっくりとお話した記憶がありません。多少の余裕が出来た数年の後、1986年、教職課程の全国大会に発表する目的で、ICUでの教職課程を分析する仕事を栗山先生と分担させて頂きました。その成果は連名で『教育研究』29号に掲載されています。ICUから各地の中学・高等学校で教育実習をした学生は、実習校の担当の先生から、教師としての能力・特性等6項目にわたる評定を頂いていました。(今でも基本的には同じだ

と思います。) 実習校が都内の場合、実習期間中、大学からも教員が一二度訪問し、実習生を指導しつつ観察し、指導教諭と同じ評定を大学へ提出しました。私の課題は、これら二種類の評定を整理・比較することでした。比較は重要でした。というのも、二種類の評定の数値は中学の英語で大きく隔たり、高等学校では多少とも接近し、理科・数学では中学・高校を通してほぼ等しかったからです。なぜ学校および教科の種別によって、評定に違いが生じるのか？ 私は二種類の数値を、教科の学力から、生徒への配慮までの6つの評定項目について、中学の英語、高等学校の英語、中学・高校の理科数学ごとにプロットした、合計5つの円グラフを作成しました。実習校での担当教諭と本学の教員との評定が具体的にはどう食い違うのか、5つのグラフにプロットした評定は、それぞれ特徴的なパターンを呈しました。私はそれぞれに蝶型、逆三角形型など名前をつけ、互いを比較したのです。この「研究」が出版された直後だと思います。栗山先生とその「成果」について意見を交わす機会がありました。その際、おそらく栗山先生にとってはごく自然な、しかし私にとってはズシンと重い指摘を受けました。円グラフを作ったまではよいが、評定の結果を蝶型だの逆三角形だのと分類し、そこから何を説明するのか、何が説明され得るのか、その経緯が分からない、という指摘であったと思います。

多少誇張して言うと、共著者の私にはいささかショッキングな指摘でした。今、冷静に振り返れば、これには少なくとも二つの背景があったようです。一つは栗山先生が受けたと想像される訓練の特質で、これについては最後に述べます。もう一つは、私自身が経験していた教育史のやり方です。栗山先生から指摘を受けた当時の私は、一応数値的データなるものを分析し、しかもグラフにプロットしたのだから、いささかでも「科学的」な成果ではないかと、思い上がっていました。そうした思い上がりを見事に粉碎する栗山先生の指摘だった訳です。しかし、弁解がましくなりますが、私の側にも個人的な事情以上の背景があったようです。私が留学中に身につけた教育史の方法は、いかにもプリミティブでした。勿論、博士課程の単位数の多い合衆国では、例に漏れず、方法論は履修せねばなりませんでした。中でも、William DrayからW. H. Walshまでの歴史哲学の著作を毎週一冊ずつ読む、方法論のセミナーに確かに出席しました。そのときの十数冊は、今でも私の書棚の一部を占めています。ですがその時読んだ様々な理論・方法論が、学位論文に向けての実際の研究調査の基礎となることは絶えてありませんでした。批判がましく言うのでも、忘恩の行為でもないのですが、ともかく実際の論文作成の方法は、事実として、プリミティブかつ単純だったと思います。指導を受けた二人の教育史家のうちCarl Kaestle教授は、自らの師Bernard Bailynの主張を持ち出し、歴史家の基本的な仕事は事態Aが事態Bへと移行する筋道を分かり易く説明することだ、と教えてくれました。私の論文を指導してくれたJurgen Herbst教授も、もしAからBへの移行が資料で十分に裏付けられない場合は、最も無理のない解釈を採用するように、と何度かアドバイスをくれました。二人の指導内容を曲解するつもりはありません。二人の数多い仕事を読めば、歴史が相当に複雑な学問であることもわかります。にもかかわらず、私が教育史の論文を作成する際に導きとなったのは、(私が理解した限りの)彼らの教えでありアドバイスでした。そうした方法が、かなり単純であったことは否定でき

ません。栗山先生の指摘がショックであった一因はそこにあったと思います。

もう一つの背景は、当然にも栗山先生が心理学を学び・研究するにあたって身につけられた方法論です。1986年以降、残念ながら先生との共同研究に参加する機会には恵まれませんでした。しかし、先生ないし他の同僚を主査とする博士課程での学位審査で、席を同じくする経験を何度か得ました。そうした経験を重ねるたびに、1987年、初めて実感した心理学と教育史の方法論上の厳密さの違いを、いよいよ思い知らされました。用語の定義の厳密さ、検定の方法の信頼度等々、その違いの基準をいくつかあげることができます。しかし、私が益々印象を強くしたのは、論文作成者の与件としての調査研究結果から、ある特定の結論が無理なく引き出せるか否かについての、栗山先生の厳正な「こだわり」でした。ある前提から出発して、調査を計画実施しデータを取る。それを解析して、これこれの条件下では、AであればBが帰結するといった結論を導き出す。私が審査に加わった学位論文のいくつかは、そうした構造を持っていたと思います。審査で栗山先生が一貫して問題にしたのは、AであればBが帰結する、という結論は間違いでないか、他の解釈のはいる余地はないか、調査のサンプルはそうした帰結を支持するに十分であるか、そもそも前提自身にAからBが帰結するようなバイアスがかかっていないか、といった諸点だったと、私は素人なりに理解しています。なかでも、Aという与件からBという帰結を確実に引き出すための条件について、先生は特に厳しかった。AからBが帰結するという判断には飛躍がないか、AからCもDも帰結しうるのに、そうした中でBのみを引き出すのは恣意的ではないか、と言った疑問であり指摘です。栗山先生のそうした疑問や指摘を耳にする度に私は、独断的な主張と対比しうる学問的な主張の特質とは何か、を改めて反省すると同時に、1987年の(今や随分と和らいだ)ショックを想い出したものです。

その栗山先生が(本来、私も退職するはずであった同じ)2012年の春、退職されます。先生

のお人柄をバランスよく伝えるのが目的であれば、拙ない文章でも、別な書き方ができたと思います。私自身、厳しい状況に置かれたとき何度か暖かいアドバイスを頂いた思い出があり、感謝は尽きません。しかし、ここでは「同期生」として、強く意識して来たことを率直に述べて、そうした感謝に替えさせて頂きました。今後とも、心理学と広く教育学、さらに大学全体やわれわれ退職者にも、これまでと変わらず意見と笑顔とを下さいますよう。益々お元気でお過ごし下さい。

栗山 容子先生の略歴および主要業績

KURIYAMA, Yoko

History and Bibliography

学歴

- 1969年3月 東京女子大学文理学部心理学科卒業
1972年3月 東京大学大学院教育学研究科教育心理学専攻 教育学修士
1977年3月 東京大学大学院教育学研究科博士課程修了

職歴

- 1969年4月 東京女子大学文理学部心理学研究室研究助手
1978年9月 国際基督教大学教養学部教育学科専任講師
1984年4月 国際基督教大学教養学部教育学科助教授
1987年4月 国際基督教大学大学院教育学研究科
1989年4月 国際基督教大学教養学部教育学科準教授
1995年4月 国際基督教大学教養学部教育学科教授

研究論文・分担執筆

- (共著)「初期言語発達の様相—感覚運動期から表象期へ」東京大学教育学部紀要 第20巻 pp.87-109 1980年.
(共著)「初期言語発達と象徴遊びの発生」『言語習得の諸相』(堀素子・F.C. パン編著)文化評論出版社 pp.251-287 1981年.
「文の自然さの判定による動詞分類の試み」国際基督教大学学報 I-A 教育研究 24号 pp.133-155 1982年.
「学習者自身による客観テストの作成と評価の試

み」国際基督教大学学報 I-A 教育研究 26号 pp.107-121 1984年.

「言語を獲得し行使する人間」『社会心理学の交差点』(星野命編著)北樹出版 pp.41-54 1986年.

(共著)「I.C.U. 於ける教育実習の評価の諸問題」国際基督教大学学報 I-A 教育研究 29号 pp.105-135 1987年.

(共著)「物を扱う遊びにおける象徴機能の発達水準」教育心理学研究 第36巻 pp.345-351 1988年.

「ICUに於ける教育実習の評価の諸問題—教授スキルに関する実習生の自己評価と指導教諭の評価」国際基督教大学学報 I-A 教育研究 31号 pp.79-96 1989年.

「ICUに於ける教育実習の評価の諸問題—実習生への評価結果の報告」国際基督教大学学報 I-A 教育研究 33号 pp.79-96 1991年.

(Co-Author) A preliminary study of tendencies to cooperate and compete by Japanese and Japanese returnee students in a modified multi-play prisoner's dilemma game. *Educational Studies, ICU*, Vol. 33, pp.47-82, 1991.

「教育実習の評価の問題」教師教育研究 第3号 pp.37-45 1991年.

(共著)「母親の子どもに対する意識・感情と対人関係の認知, 人格特徴との関連」国際基督教大学学報 I-A 教育研究 34号 pp.33-50 1992年.

「認知課題における親の働きかけ方略の国際比較」『発達心理学ハンドブック』(東洋他編) pp.1317-1321 福村出版 1992年.

- (共著)「低出生体重児の縦断的研究—一歳半までの子どもの発達と親の関わり」国際基督教大学学報 I-A 教育研究 37号 pp.1-20 1995年.
- (共著)「英語聴解力テストに関わる要因の検討」国際基督教大学学報 I-A 教育研究 38号 pp.63-79 1996年.
- 「中等教育における教育実習生の自己評価尺度の検討」教育心理学研究 第44巻 pp.322-331 1996年.
- (共著)「ビー玉獲得課題を用いた2人ゲーム遊び方略の発達」発達心理学研究 第7巻 pp.52-61 1996年.
- (共著)「低出生体重児の多面的縦断研究—3歳までの発育・発達と養育環境」小児保健研究 第57巻 pp.745-754 1998年.
- 「一般学習能力考査 (SAT) の追跡調査研究」『大学入試データの解析—理論と応用』(柳井晴夫・前川眞一編) pp.202-213. 現代数学社 1999年.
- 「国際基督教大学における SAT について」大学入試フォーラム No.21 pp.32-40 大学入試センター 1999年.
- 「総合試験」大学入試研究の動向 第17号 国立大学入学者選抜研究連絡協議会 2000年.
- 「乳幼児の気質構造の分析」小児保健研究 第59巻 pp.417-423 2000年.
- (共著)「低出生体重児の気質と母親の意識・感情の発達的变化の相互関連性」小児保健研究 第60巻 pp.511-518 2001年.
- (Co-Author) The development of referential choice in English and Japanese: A discourse-pragmatic perspective. *Journal of Child Language*, Vol. 33, No.4, pp.823-857, 2006.
- (共著)「学習能力考査の事後分析と課題—項目反応理論による検討」大学入試ジャーナル No.4 pp.229-235 2007年.
- (共著)「日本人大学生の価値意識」発達心理学研究 第23巻第2号 (印刷中) 2012年.

【報告書】

「父親と母親の子どもに対する働きかけ方略の実

証的研究」東京女性財団助成事業年次報告書 東京女性財団 pp.68-69 1993年.

(共著)「2-4歳児の象徴遊びと玩具の役割. 教育者・研究者のための遊び・おもちゃに関する研究集 I」佐藤玩具文化財団 pp.155-178 1993年.

「英語聴解力テストに関わる要因の分析」平成7年度文部省科学研究費補助金総合研究 (A) 『多変量データ解析の利用による大学入試データ解析システムの開発研究成果報告書』(研究代表者 柳井晴夫) pp.57-65 1996年.

「SATは入学後の成績を予測するか (その1) SATの内容分析」平成7-9年度文部省科学研究費補助金基盤研究 (A) 『多変量データ解析の利用による大学入試データ解析システムの開発』(研究代表者 柳井晴夫) pp.255-260 1998年.

「モニター試験の問題分析」『平成8-10年度大学の各専門分野への適性の評価を目的とする総合試験のあり方に関する共同研究最終報告書』 pp.65-70 大学入試センター研究開発部 1999年.

「日本語児の格助詞産出の分析」Emergent Productivity in the Use of Case Particles by Japanese Children. Report of the Grant-in-Aid for Scientific Research (A) (2) (1999-2000) Supported by Japan Society for the Promotion of Science and the Ministry of Education, Science, Sports and Culture (Head Investigator: Sirai, Hidetosi A Crosslinguistic Study for the Universal Developmental Index, pp.114-123 2001年.

「項目反応理論による一般学習能力検査 (SAT) の予備的分析」平成11-13年度文部省科学研究費補助金基盤研究 (B) 『大学入学者選抜資料としての総合試験の開発的研究成果報告書』(研究代表者 柳井晴夫) pp.120-129 2002年.

【その他の出版物】

「マークシートの特性とその利用」大学時報 Vol.46 pp.60-63 1997年.

「吃音など構音上の問題とその対応」pp.47-57 ふたば 第68号 財団法人母子健康協会 2004年.